

だい きやまとし たぶん かきょうせいかいぎ だい かいかいぎ ろく ようやく
第4期大和市多文化共生会議 第5回会議録(要約)

にちじ ねん がつ にち ど
日時: 2016年7月9日(土)14:00~16:00
ばしよ やまと し やくしよぶんちようしや かいかいぎしつ
場所: 大和市役所分庁舎2階会議室
しゅつせき いん いしま いとうもとみ いのみさと くするみこ しらとりせつろう しやうじ
出席: 委員(石間フロレデリサ、伊藤素美、猪野美里、楠瑠美子、白鳥節郎、東海林
まりえ、瀬谷麻里、田野井咲奈、ハゲイ パトリシア、府川貴恒)／大和市国際・
だんじよきようどうさんかくか しのぎき みずお こうえきざいだんほうじんやまと し こくさい かきょうかい さかい
男女共同参画課(篠崎、水尾)／公益財団法人大和市国際化協会(酒井、
たなか こにし いしかわ いじょう めい
田中、小西、石川)以上16名
けつせき いん たかばやしあきこ ふじもとやすお けいしやうりやく
欠席: 委員(ウプレティ マトリカ、高林明子、藤本康男)(敬称略)

1 前会議の振り返り

ぜんかいかいぎ ふ かい
前会議では、NPO法人かながわ外国人すまいサポートセンターの裴安氏から「共に
ぜんかいかいぎ ほうじん がいこくじん べいあん し とも
生きる地域をめざして」と題して外国人の社会参画について講話いただいた。この講
い ちいき だい がいこくじん しやかいさんかく こうわ こう
話をうけて、各委員から感想を述べた。

○日本にいる外国人の中でも在日コリアンに特化されてのお話と思った。オブラートな
にほん がいこくじん なか ざいにち とつ か はなし おも
言い方ながらも、苦労されて日本で在日コリアンの居場所をつくってきた方なのと思
い かた くろう にほん ざいにち い ばしよ かた おも
った。在日コリアンは名前を聞けばわかるが、日本語がうまかったりするので問題が表
ざいにち なまえ き にほんご もんだい おもて
に出にくい、日本人にはわかりにくいところもあり、そうしたところでも苦労されているの
で にほんじん くろう
だと感じた。

○初めて聞く話もあって衝撃だった。日本では、外国人と日本人の立場が違う点が認
はじ め き はなし しやうげき にほん がいこくじん にほんじん たち ば ちが てん にん
識されていないことに気付かされた。この会議でも外国人だからといって特別扱いす
しき きづ きづ かいぎ がいこくじん とくべつあつか
ることはないという議論があった。例えば、スタジアムの図を使って、子どもと大人に同
ぎろん たと ず つか こ おとな おな
じ(平等な)ケアをしても公正ではないという話をされた。わたしたちは受け入れる側
びやうどう こうせい はなし う い がわ
の責任を持って考えなければいけないと思う。

○外国人って何だろうと考えるきっかけになった。以前フランスにいたころは、自分が外
がいこくじん なん かんが い ぜん じぶん がい
国人であることを意識したり、深く考えたりしたことがなかった。外国人と日本人が共
こくじん いしき ふか かんが がいこくじん にほんじん とも
に地域で生きていく上で重要なのは、言葉の障害があっても、特技や趣味などを通し
ちいき い うえ じゆうよう ことば しやうがい とくぎ しゆみ とお
て交流につなげていくこと、という言葉が非常に心に残った。

○一番びっくりしたのは、外国人の子どもが学校に行かなくてもいいということ。過去の多
いちばん がいこくじん こ がっこう い か こ た
文化共生会議の提言を読んでみたが、問題はいつも同じだと思う。カナダ、ドイツが先
ぶん か きょうせいかいぎ ていげん よ もんだい おな おも せん
進事例だが、その国に来たらその国の言葉を覚えてもらおうとしている。日本にいる外
しんじれい くに き くに ことば おぼ にほん がい
国人も日本語を学んでほしい。学校の授業を見てあげるのもたいへんだが、基本的な
こくじん にほんご まな がっこう じゆぎやう み きほんてき
日本語がわかるかどうかは、授業を受ける上でも大切なこと。日本はパッチワークでい

つまでも問題が解決しない。移民を受け入れるような歴史もないし、共生しようとする文化がないのではないかと。大和市はよくやっていると思うが、限界がある。小学校低学年の場合など、日本語を指導したり、日本語を学ぶことができたりする制度をしっかりつくるべき。まずは日本語。町内会などはその次の問題。しかし、ひとつの自治体が行おうとしても無理。一自治体でなく、国全体であることが必要。少子高齢化で人口が減ることがわかっていながら何もできていない。外国人の受け入れに対する施策がないと問題は解決しないと思う。

- 日本の歴史を振り返ると、多文化共生のもろもろを教育外のところでやろうとしても、一般の認識が広がっていかない。日本の制度、法律上のところを整備してもなかなか進展がないのではないだろうか。
- 歴史的、制度的に考えても外国人は見えないところ、見えないところで差別を受けている。同じ住民として人権を守る土壌をつくっていく必要があるだろうと思う。
- 外国人の子どもは学校に行かなくてもいいということを知らなかった。今までみんなに学校にいかないでだめだよ！と言ってきた。自分の言っていることがウソではあったけれど、学校を卒業できた子がいっぱいいてよかったと思っている。日本はかつてと違って、外国人にもウェルカムになっている。確かに困ることがあるけど、サポートがすごい。他の国は分からないが、おそらくフィリピンに行っても外国人のための政策は何もない。日本では外国人に生活保護もあり、病院での通訳もある。いつまでも外国人と言っていないで、外国人だって、努力すれば変わる。外国人だからこそ、外国人の方から何とかしたい。外国人が抱える問題は、外国人が自分から解決に向けて動き出すことができるのではないかと思う。
- 日本語教師をしているのでたくさんの外国人と会っているが、知らないこともたくさんあった。調べたら分かることかもしれないが、そうした外国人と日本人の違いをみんなで理解できるようになればいいと思った。平等になるために、みんなに同じものをあげるのではなく、その人に合ったものをあげるというのはいい考えだと思った。
- 日本人は日本国憲法の下で、教育を受ける権利と受けさせる義務がある。外国人は、(教育を受ける)権利はあるが、(教育を受けさせる)義務はない。教育を受けてもいいし、受けなくてもいい。でも、外国人も権利はあるので、例えば、オーバーステイでビザがない状態でも中学校や高校に行くことができる。大事なものは教育だと思う。多文化共生の現実を知って、どんなふうに解決したらいいか、みなさんとともに考えたい。
- 外国人に教育を受けさせる義務はないということ、今まで言っていないし、これから言わないと思う。小学校の基礎をつくる時期がとても大切。子どもは日本語をどんどん学んでいくが、親は母語しかわからないのでコミュニケーションがとれなくなる。

先日、通訳に行った際はまさにこのケースだった。思春期のときに意思の疎通がとれないのは、日本人であっても大変なことなのに、言葉が通じない外国人の親子はもっと大変だと思う。この多文化共生会議で、外国人のことを考えてくださるみなさんがいることをたいへん心強く思っている。

- よい市民になるには日本語をきちんと学ぶことが大切だと思っている。市役所や幼稚園のお知らせもだんだんわかるようになってきた。以前は通訳員頼みだったが、少しずつ自分のことができるようになってきた。この会議に出るのも緊張するが、もっと慣れていきたい。はじめは、日本語がわからないので外に出るのがこわかったけれど、子どもも成長しているので私も頑張りたい。
- 教育は子どもだけでなく、大人も重要だと私は思う。日本育ちの子どもが親の母国語を上手に話せるケースは少ない。自分の子どもも日本生まれ日本育ちなので、中国語ができない。ただし、親の教育も大切。日本に住んでいるので、日本語をしっかりと覚えたいと生活に困る。私は外国人、日本人とかの区別をあまりしたくないが、自分たちで壁をつくってしまうことがあるのではないかと。お互いに理解する必要がある中で、「私は外国人だから日本人とは考え方が違う」という意識が強すぎるとお互いの理解が進まないで、そういう大きな枠を捨てたほうがいいのではないかと。外国人、日本人と区別するより、同じ地域の一員として暮らしていければと思う。

2 第1期提言について

- 委員長：裴安さんの話を受けて第4期会議としてどのような方向性で進めていくか、これから検討していきたい。前回会議でも第1期から第3期までの提言について話をしたが、問題は出尽くしている気もする。まずは、第1期から第3期までの提言内容をみなさんと共有したい。その上で、第4期はどうしていくか考えていきたい。
- 委員：確認だが、第4期会議の最終的なゴールは大和市に提言をすることか。
- 事務局：当初の計画では、必ずしも大和市に提言することにこだわっているわけではないが、第4期会議で、大和市に提言を出したいという話があがっているので、まずは今日の会議で過去の提言内容を振り返ることにした。
- 委員：第1回会議の話は、提言を出して終わりではなく、自分たちで何かやるところまで進めて、その何かをこの会議で実行することだと思ったが。
- 事務局：まさにその通り。
- 委員長：その辺の会議の方向性については、まだみなさんと共有できていないような気がする。提言なのか、提言ではないのか、その点は保留にしておくとしても、前回の裴安さんのお話は、この第4期会議の方向性を考える上で参考になる。まだ方向性

は見えていないが、みなさんで話し合っていて突き詰めていけば、外国人の社会参画など、この会議のテーマに沿うものになってくると思う。

- 委員:この会議に出席しているみなさんは、問題点はどこにあるのか十分認識していると思う。わたし自身、たいへん勉強になっている。過去に提言、要望をあげても実現できていないものもあると思うが、実現可能なものにしぼっていったらどうかと思う。みなさん、現場で頑張っておられる方もいて、すごい。本当は、こういう会議の委員がもっと増えなければいけない。草の根で広がっていかないと、いくら良いことを提言しても実現しない気がする。この認識を持って、何らかの課題解決につながると思っている。この会議はたぶんうまくいくと思うが、市長は4年で交代するもので、市長に提言して良くなるというものでもない。

- 委員長:それでは、第1期から第3期までの提言内容の説明に移りたい。

第1期提言「多文化共生社会の実現に向けて」

事務局から第1期提言について説明した後に質疑応答を行った。

○社会生活部会テーマ

- 1 外国人市民への情報提供システムの確立
- 2 外国人市民のための相談窓口の充実
- 3 外国人市民が地域住民とコミュニケーションを図ることのできる環境整備

○教育文化部会テーマ

- 1 外国籍児童生徒への指導等の充実
- 2 外国人の日本語学習を図るための環境整備

誰が日本語を教えるのか

- 委員:学習支援について、各学校に国際教室を設置しているようだが、国際教室の担当教員は自由に決めているのか、専門性を見て決めているのか。また、担当教員は国際教室の専任なのか。

- 事務局:自分の知る限りで説明すると、専門性は問われていない。極端に言えば、日本語指導の専門性を持たない先生が国際教室の担当になっていることがほとんど。小学校では、国際教室の担当に時間短縮勤務の教員があたっていることがある。中学校では、最低週に10時間は外国人生徒に指導しなくてはいけないという決まりがあるようだ。10時間といっても、生徒が20人いたら、一人の生徒に教える時間はわずかなもの。予算は県の教育委員会が持っているようだが、人員配置などは各市町村が行っている。

- 委員：わたしも(国際化協会の)日本語・学習支援ボランティア養成講座を受けた。日本語を教える専門性を求められるが、多文化共生の背景となる知識はどこで学べばいいのだろうか。経験のない初めての人だと、すぐに学習支援を始めるのはむずかしいのではないかな。
- 委員：全体的に人材不足。人材を育成するために、ボランティア養成講座などを開催していると思うが、実際の活動はすべてボランティアの自己負担になっている。そのような状況で、はたして外国人が安定して日本語を学べる環境をつくれるのだろうか。プロの日本語教師が教えることのできる仕組みをつくらない限り、こうした問題は解決しないのではないかな。
- 委員：第1期提言は2007年に行われたが、現状は変わっていないと思う。日本語教室によって状況は違うが、場所を確保するには力がある。お金も必要。(2016年11月から)生涯学習センターが新しくなると使用料も高くなる。日本語教室はほとんど無料なので、学習者や支援者からお金を出してもらうことになるかもしれない。
- 委員：高い志を持って日本語を教えていると思う。だが、ボランティアに任せ切りののではないかな。日本語教育は必要だけど、行政はお金も人も出さずつもりはないのではないかな。この会議のメンバーで何らかの取り組みを実行していくのだとすれば、いろいろ考えなくては…。
- 委員：みなさん、あまり各学校の現場を見たことがないと思うので、実態を知った方がよいのでは…。
- 委員：先日、日本語教室のボランティアを始めたい人と話す機会があった。日本語を教えるスキルを身につけるにはお金がかかる。私も時間をかけて資格をとった。同じように何十万円ものお金をかけて資格をとったけれど日本語を教える仕事がないため、眠っているような方はたくさんいる。
- 委員長：日本語を教えることができる能力とは何だろうか。例えば、日本語を教える人は、インドシナ難民と在日韓国・朝鮮人の違いが分かっているかなければ、日本語を教えることはできても、日本にいる外国人をサポートすることはできていないと考えていいのだろうか。
- 委員：日本語を使って日本語を教えるわけなので、プロの日本語教師であれば、どの国出身の外国人であっても日本語を教えることができると思う。ただし、生活に関する情報など外国人への生活支援ができていないわけではない。
- 委員長：日本語教室に来る外国人は日本語が知りたいから来るのか。それだけではなく、いろんな情報が知りたくて、友達がほしくて来るのか。
- 委員：生活情報を得たり、友人を求めたりなど、日本語の学習以外の面もあると思う。

○委員長：第1期では日本語の課題を取り上げた。お金、人材、場所・・・何が問題なのか。この第4期のみなさんとともに、この問題をもう一步踏み込んで考えたい。それは第1期からの引き継ぎというわけではないが、われわれにできることなのかもしれない。

外国人の立場から・・・

○委員：実際にわたしも複数の外国人から日本語を学びたいとの相談を持ちかけられたことがある。わたしからは大和市内にもボランティアの日本語教室があると伝えたが、相談者は「週1回では物足りないので、もっとたくさん習いたい」との反応だった。市内には日本語学校はないので、仕方なく市外を含めた日本語教室を転々としているようだ。長く続けて日本語を勉強したいという需要があるのを感じる。熱心に勉強したい人にとっては半年から1年間くらい毎日学習を続けることができる日本語学校があればと思う。

○委員：日本語を習いたい人は2つに分かれると思う。仕事をしている人としていない人。仕事をしていない人は、集中的に、できれば半年くらいは毎日勉強したいと考えていることが多い。一方で、仕事をしている人は毎日、日本語教室に通うことは無理。ご存じの方も多いと思うが、ボランティアの日本語教室は(学習者の)出入りが激しいのが現実だと思う。今週末学習者が来週は休んでしまう。そのため、毎週末来ている学習者は同じ勉強を繰り返しているようでつまらないと感じて不満を持ってしまうこともある。

○委員：つまり、外国人の中にはお金を払ってもいいから、長く日本語を学びたいと思っている人もいます。日本語ができるかどうかは、これからの自分の生活に関わってくる。

日本語教師の立場から・・・

○委員：日本語教師の勉強をしたい方は、ボランティアではなく、仕事として、自分の生活の基盤にしていきたいと思っているはず。日本語を教える仕事は時間も手間もかかるものである。仕事を続けながらボランティア(給料なし)で日本語を教えるのはそもそも無理がある。もし、大和市内で日本語教育を行っていくのであれば、きちんと日本語教師がpayできるような、お金が回る仕組みが必要になってくる。

○委員長：前回、日本人はどうして外国人行政に意識が低いのか、という話が出た。なぜ、ボランティアがやめてしまうのか。日給を払えばいいという話ではないと思う。好きでないと続かない。やはり、人に何かを教えるのはたいへん。そうした人が集まる資金や情報がうまく回る仕組みが必要ではないか。

○委員：先ほどお話しがあったように、日本語を習得したい人は、お金を払ってもいいか

ら毎日続けたい人と、とりあえず(週1回くらい)習得したい人の2つに分けられる。お金を払ってもいいから日本語を学びたい人は、どこかで勉強すればいいと思う。日本語を教えるのは、やはり大変で、わたしの友人は1年くらい通って日本語教師の資格を取得したようだが、日本では日本語教師の需要がそこまで多くない。需要があるのは主に東南アジア。もし、大和市に日本語を学ぶ制度ができれば、そうした資格を持った人も来てくれるのではないかな。もちろん、ボランティア(無償)ではなく、報酬がないと来てくれないだろう。資格を取得するのに何十万もかかるわけだから、少なくとも払った分は回収したいと思うのではないかな。

- 委員：国際教室があるのはいいが、専門性のない教員が日本語を教えるのであれば、お金も時間も無駄ではないかな。やるのであれば、専門性を持った人員を配置すべき。「日本語教師」という国家資格はないが、(420時間の養成講座などを受講するには)数十万円くらいのお金がかかる。外国人と接するのはどういうことなのか、相手を理解できる言葉の使い方はどうなのか、日本語教師の養成機関でもそうしたことを教えるわけではない。

日本語を学ぶためにはお金が必要？

- 委員：日本語教室は外国人にとって、とてもいいことだと思うが、日本人に対して外国文化に興味を持ってもらう機会をつくるのであれば、英語の教室があってもいいと思う。日本人も、外国人も参加できるような、外国文化に触れることができる教室があってもいい。
- 委員：私も長く日本語教室に通った。結婚して、子どもができて日本での生活がすごくたいへんだった。学校のプリントとか読めないし、子どものお母さんたちとコミュニケーションをとることができなかった。ボランティアの日本語教室は必要なことを教えてくれる。教室では、(外国人の学習者と日本人の支援者)が1対1となるので、何を聞いても答えてくれる。漢字を習いたかったら漢字、会話だったら会話を勉強できる。お金は資料代として1回100円。だから、支援者は外国人の学習者のためにやっていて(報酬は)何ももらっていない。もし、支援者に報酬を出すとしたら、学習者は会話を勉強することができなくなって、学校のようにになってしまう。学習者がやりたい勉強(=会話)ができなくなってしまふ。ボランティアの先生たちは日本語教師の資格がなくても、日本語を教えることができれば十分だと思う。外国人の学習者が必要なことを教わることができれば、それでいい。
- 委員：問題は2つに分ける必要がある。子どもたちに対しては、プロの日本語教師が教えた方がいい。なぜなら、会話ができて、読み書きができなかったら日本の公教育

についていことができなくなってしまうから。一方で、生活情報を中心に、1対1で日本語を勉強したいと考える外国人も確かにいると思う。お金をかけずに日本語が学べる場も必要。

○委員：もし、親が二人とも外国人だったら、給料はそんなにもらっていない。学校に行くのはお金がかかる。

○委員：就学援助とかがあるのではないかな。同じ住民なのに外国人はもらうことができるのか。

○委員：もちろん、外国人も就学援助を受けられることができる。今の二人の話は学校の子どもたちと外国人の主婦を対象にしている、話が食い違っていると思うが・・・。

○委員：日本人の子どもであれば塾に行くが、外国人の子どもは行かない。(日本人の子どもとは)全然ちがう。親は日本語を勉強するが、子どもは学校だけ。

○委員：だから、学校の中にきちんと日本語を教える先生を配置してほしいという話をしている。

○委員：もし、親がお金を払うのであれば大丈夫だが、払わないのであればできない。

○委員：小中学校に通っているのであれば、お金を払う必要はないのでは・・・。

○委員：例えば、小学校には ALT などの英語を教えるための先生が来ている。カナダであれば、日本人の子どもが学校に来たら、英語がわからないはずなので、英語を教えるためのプロの教員がいる。

○委員：現在、大和市には学校の授業が終わったあとに勉強できる仕組みがある。そこで、子どもたちに日本語を教えることができればいい。

○委員：学校にいる間と終わった後で区別して考えた方がいいのではないかな。

○委員：放課後のクラスは、学校の先生はほとんどいない。先生たちは放課後に部活や自分の仕事をやって帰る。

○委員：子どもの教育のことはかんたんではないけれど、プロの先生が子どもの日本語教育を担える仕組みを考えると必要があると思う。専門知識のない先生が国際教室にいればいいのかという話ではない。

○委員長：学習支援が必要なのか、日本語教室が必要なのか。日本語を覚えたいと思っている人に対するボランティアの日本語教室はお金がかからない。今日の話はかみ合っていないところもあるかもしれないが、必要なのは、子どもたちのための学習支援の場なのか、成人を含めた日本語学習の場なのか。専門性を持った人材を両方に配置するのは無理なのではないか。

○委員：両方ではなく、成人の日本語学習の場はお金をかけなくても工夫をすればできるはず。しかし、本当に取りかからなくてはいけないのは子どものこと。

○委員長：それはつまり、子どもたちのための学習支援ということか。

○委員：そういうこと。

子どもたちへの学習支援

○委員：国際化協会でも子どもたちに対して学習支援をしていると思うが、誰が教えているのか。

○事務局：元教員、主婦、学生、定年退職者などいろいろな方がボランティアしてくださっている。日本語力が不足している子どもたちを対象としている。

○委員：わたしも子どもを教えたことがある。子どもであれば、学校の教科書がある程度読めたらOK だと思うので、文法などの専門的な日本語指導は必要ないのではないかと。支援者は日本語教育の素養を持っていることが大切だと思うが、子どもといっしょになって勉強していけるスキルも大切。お金、場所、週何回やるかなどを決めないと進められないものかと思うが、例えば、試しに一つの学校でそうした支援ができないものか。わたしたちでは大したことができないかもしれないが、みなさんといっしょに力を合わせてがんばってみるといいかも、と今日の話聞いて思った。

○委員：日本語を教える専門的な知識もやはり大事なことだと思う。わたしは元教員だが、日本語教師ではないので、日本語の指導という点ではできていないこともある。また、教科書が読めても理解していないとダメ。

○委員：その通りで、読めることは読めるので、読めても意味がわからないとダメ。「読める、でもわからない」ことが問題。

○委員：インターネット上で教材はダウンロードできるので、場所があれば学習支援を行うことができると思う。

○委員：支援者となる人材はいると思うので、場所と費用、せめて交通費くらいがあれば。

○委員：人にわかりやすく教えるには経験が必要。文化が違う相手に教える点も重要だと思う。相手がどのくらいわかっていないか、理解することが必要。

○委員：そこが大事。相手の文化が理解できるかどうかは、やはり研修しないと分からない。そのため、研修の機会がほしい。自分で勉強しても限度があるもの。学校の先生にも年に2回ではなく、月に1回とかそうした機会があればと思うが。

○委員：学校の先生は過労で休職している方もいるので、忙しすぎる。国際教室の担当の先生などに限定してできれば。

じつたい し 実態を知る

- 委員長：今日の話し合いは、誰を対象にするかで話が食い違っていたかと思う。子ども向けの学習支援なのか、大人向けの日本語の支援なのか、その辺がはっきりしていなかった気がする。英語教室はどうなのか、という話もあった。
- 委員：ボランティアの日本語教室はいろいろなサークルがあるので、その実態を知る必要があるのかなと思う。見学をして、どういう状況なのか、何が足りないのか、先に勉強してみるのはいかがでしょうか。せっかくボランティアが一生懸命やっているわけなので、もっと広げていければとわたしは思う。ダメだと切り捨てるのではなく、どうやって良くするのか、などをみなさんと考えていきたい。10年前の提言なので、今はどうなっているのかを確認した上で何ができるのか、もっとサポートできるのであればどんなサポートができるのか考えたい。子どもの学習支援にしても、同じ。
- 委員：わたしも全部はわからないが、みなさんは市内の日本語教室や子どもの学習支援教室がどのくらいあるか、ご存じだろうか。そういう資料があった方がわかりやすいかもしれない。国際化協会の機関誌「Pal」に掲載している。NPO法人かながわ難民定住援助協会では日本語文法の集中講座をやっている。
- 委員：できれば見学したい。どんなことをしているのか、見る必要がある。

3 スケジュールの確認

じ かい かい ぎ がつ にち ど おな し やくしよぶんちようしゃ かい かい ぎ しつ おこな
次回の会議は 9月10日(土)14:00～、同じ市役所分庁舎2階会議室で行う。

い じょう
以上